モンゴル語

一　蒙古語学科の誕生と発展　一九〇八―一九四五年

モンゴル科の開設とその背景

モンゴル語を専攻する蒙古語学科は、最初、一九〇八（明治四十一）年に東洋語速成科（一年制）のひとつとして設けられ、計一六名の「修業生」を出した。この中には、後に「蒙古語部主幹」になる、清語科卒業の神谷衡平も含まれていた。

三年後の一九一一年に、モンゴル語を教える最初の公的機関として、正式に蒙古語学科が誕生した。科の名称は、一九一九（大正八）年から「蒙古語部」、外事専門学校時代は「蒙古科」である。「蒙古語」が「モンゴル語」に改められるのは、戦後の一九六一（昭和三十六）年で、それまでは一貫して、「蒙古語」という漢字表記が用いられた。

一九一一年の四月といえば、内外モンゴルとも、まだ清帝国の一部を構成していて、独立国としてのモンゴルは存在していなかった。この年の十二月にフレー（現オラーンバータル）で独立宣言がだされ、活仏を国王とする、モンゴル人の新国家が成立するので、学科設立は、きわめてタイミングがよかった。

蒙古語学科が、日本の大陸政策のなかで設けられたのは、疑いの余地がない。日露戦争後の一九〇六年に関東都督

府が置かれ、「満鉄」が設立され、内モンゴルの調査が本格的にはじまる。第一回日露協約（一九〇七年）では、満州の南部が日本の勢力範囲に決まり、第三回協約（一九一二年）では、北京を通る経線が、日露の勢力範囲の境とされた。これらの秘密協定からもわかるように、内モンゴル東部への勢力扶植は、日本の「満蒙政策」の根幹をなしていた。この地域は、一九三二（昭和七）年に「満州国」が成立すると、その一部を構成することになる。その後一九三七年には、内モンゴル西部に「蒙古連盟自治政府」（蒙疆政権）が樹立され、やはり日本の間接支配下に入る。

このようにモンゴル地域は、日本の大陸政策のなかでも、重要な位置を占めていたゆえ、その言語の教育も当然、重視された。

他方、純粋に学問的関心からモンゴル語を研究する学者も、一九〇〇年代から現れはじめる。古典作品『モンゴル秘史』をモンゴル語から訳した、那珂通世の記念碑的労作『成吉思汗実録』（大日本図書）の出版は、一九〇七年であった。

二十世紀のモンゴル人の歴史は、全体としては、現在のモンゴル国（外モンゴル）を中心に推移したが、日本と密接な関係のある地域は、内モンゴルであり、ごく短い期間をのぞけば、基本的に内モンゴルのモンゴル語が、一九四五年以前は教授された。外モンゴルのハルハ＝モンゴル語の教育に移行するのは、第二次大戦後、しばらくたってからである。

モンゴル語教育のパイオニア

蒙古語学科ができてしばらくは、常勤の先生が置かれず、東京大学の藤岡勝二（アルタイ言語学）が、講師としてモンゴル語を教えた。モンゴル科のなかには、ひとつの流れとして、言語学、特にアルタイ言語学への志向が見られ

るが、最初の講師の藤岡がその種をまいたといっても、それほど誤りではないだろう。なお藤岡は、モンゴル語を教えなくなったあとも、外語で言語学の講義を担当した。

最初の専任教官は神谷衡平で、一九二〇（大正九）年に着任し、「蒙古語主任」となった。約一年半の北京留学からもどり、一九二二年から「蒙古語部主幹」と「蒙古語主任」を兼ねた。なお一九一九年から二一年までは、形式的に「支那語部主幹」の宮越健太郎が「蒙古語部主幹」を兼ねた。

神谷はもともと中国語が専門だが、東洋語速成科でモンゴル語を学び、『蒙古語入門』（善隣書院、一九一九年）も著わしている。これは「我国勢に最も関係深き［中略］内蒙の土語に就て其発音、文法及会話等を最も実用的に簡易に説かんとする」（緒言）入門書であった。

一九二五年四月から、拓殖科を卒業したばかりの出村良一が、助教授として教えはじめた。一九三〇年には「蒙古語主任」に就任する。しかし「ウラル・アルタイ系言語の研究において学界からその将来を嘱望されていたこの若い学徒」（神谷衡平の表現）は、病をえて、一九三三年八月に三十歳でこの世を去った。『東洋学報』に連載された「満州語及び通古斯語に於ける動詞転化の接尾語について」（一九三〇年）が、まとまった研究成果としては、ほとんど唯一のものである。一九三四年には、神谷がふたたび「蒙古語主任」に復帰した。

出村の後任は竹内幾之助で、外語が四年制になって最初の卒業生のひとりである。一九三三、三四年度に非常勤講師をつとめたあと、三五年に助教授の辞令をえた。彼は一九三一年夏には、江上波夫を中心とした、東亜考古学会のシリーンゴル調査隊にも参加し、その報告書『蒙古高原横断記』（朝日新聞社、一九三七年）では、言語と宗教の項を執筆している。ほかに著書としては、『実用蒙古語会話』（大学書林、一九三三年）や『蒙古語教本』（蛍雪書院、一九四一年）などの会話書、教科書がある。

竹内幾之助

出村が未完成のまま残した部分を竹内が補い『蒙古語四週間』として一九三九年に大学書林から出版した。一九四二年八月に改訂第五版、三千部が出ているので、当時としては、相当よく売れたことがわかる。この教科書は、戦後も新版がでている。

竹内は戦後まもなく一九四六年に病死した（享年四十一歳）。初期の教授は二人（出村、竹内）とも、十分な学問的業績を出すまもなく、若くして亡くなった。

小島武男は、一九二四年卒業だから、出村や竹内よりも先輩である。新校舎完成の祝賀会（一九二一年）で、学生代表としてモンゴル語で挨拶をしたという記録が残っている。天理外語や蒙疆学院（張家口）を経て、一九四二年に外語の非常勤になった（教授発令は一九四六年）。代表的著作に『蒙古語文典』と『標準蒙古語会話』（いずれも文求堂、一九三八年）がある。特に前者は、独自の観点から書かれており、評価が高い。

モンゴル人の先生たち

最初の外国人教師ロブサンチョイドン（羅卜蔵全丹、一八七五年生まれ、内モンゴルのハラチン左旗出身）は、東洋語速成科時代の一九〇九（明治四十二）年から教えはじめた。一九一二年に外語を辞めた後、一度帰国し、その後ふたたび来日し本願寺の大谷光瑞がつくった「二楽荘」で、橘瑞超（大谷探検隊の主要メンバー、一九一四年に『蒙

古語研究』を出版）や陸軍将校らにモンゴル語を教えた。彼は、まさに日本におけるモンゴル人教師の第一号である。彼が帰国後にモンゴル語で著した『モンゴル風俗誌』は、内モンゴル人の書いた最初の民俗学の著作として、今日たいへん高く評価されているが、外国でモンゴルを紹介する仕事に携わったことが、この著作を書かせたひとつの動機になったと考えられる。なお、この『モンゴル風俗誌』の手稿の一部は、東京外大図書館に所蔵されている。

二代目のモジンガ（漢語の表記は韓穆精阿、韓は姓ハノードを音写、内モンゴルのモンゴルジン地方出身）は、一九一二年から一〇年間教え、初期のモンゴル人教師として貢献した。一九一六年には『蒙語初歩独習』（古屋諦道訳、文求堂）を刊行している。一九二二年に大阪外国語学校が設立され蒙古語部ができると、その最初の外国人教師として赴任した。ここでも『蒙和辞典』（甲文堂、一九二八年）やさまざまな教科書を出版するなど、モンゴル語教育の基礎を確立した。

一九二二（大正十一）年にブリヤート＝モンゴル人のゴムボ＝バドマジャブが、着任した。前年にフレーで革命が起こり新政権が誕生し、外モンゴルに対する関心が高まっていた時期に、外モンゴルのハルハ方言を教える教師が招かれたのは、偶然ではないだろう。かれは二四年にフレーへもどり、モンゴル人民共和国憲法の起草委員にも選ばれた。

四人目は東モンゴルのハラチン右旗出身の施雲卿（シー＝ユンチン、モンゴル名はウルジー）だった。一九二五（大正十四）年から一九四一（昭和十六）年まで一六年間も教えた。北京で『蒙古語会話』（蒙文書社、一九三〇年）、東京で『現代蒙古語』（文求堂、一九三六年）を出版している。なお彼は一九二九年からは中国語も教えた。

次の外国人教師ゴムボジャブ（高穆嘉普、チャハル出身）は、一九四一年から四二年まで教えた。彼は当時の内モンゴル西部（徳王の「蒙疆政府」が支配）の代表的知識人のひとりで、マルコ＝ポーロの『東方見聞録』のモンゴル

施雲卿（ウルジー）

語訳を張家口で出版している。内モンゴルにもどったあと、日本軍当局に逮捕され、拷問を受け、それがもとで亡くなった。

ゴムボジャブのあと、モンゴル人の専任の先生のいない時期が少しあった。最初の非常勤の外国人講師として、やはりチャハル出身のソドノムジョムチョ（索特諾穆卓瑪綽）が、一九四三年九月から半年教えた。かれは、新中国成立後、内モンゴル人民出版社の社長を務めた。

次のチョグジラン（朝克吉朗、ハラチン右旗出身）は、一九四四年に約三か月のみ教えた。彼は、『イフ＝フフ＝トグ』などいくつかの雑誌にモンゴル語の文学作品を残しているが、若くして亡くなったためか、その経歴ははっきりしない。

一九四四年まで、モンゴル科で教えたモンゴル人の先生は、非常勤まで含めると、全部で七人だった。ゴムボ＝バドマジャブを除くとすべて内モンゴル出身で、中でも内モンゴル東部出身の人が多かった。これは、日本とこの地域の関係が大変密接だったことと直接関係があろう。これらの先生たちの一部は、モンゴル語学者として教科書・辞書を出版し、一部は、その出身地などで重要な文化的活動を行い、それが現在でも高く評価されている。

第二外国語重視のカリキュラム

新制大学になる前の、モンゴル科のカリキュラムは、第二外国語（中国語、時期によってはロシア語も選択可）が

必修で、時間数も多く、これは他の科と全く異なる一大特色であった。

学科新設のときは、中国語（当時の用語では清語）が必修とされ、その時間数も、一年生では一六時間で、専攻のモンゴル語の時間数（六時間）をはるかにうわまわった。二年、三年もそれぞれ六時間の中国語の学習が可能だった（選択）。中国語が必修とされたのは、一九一一（明治四十四）年当時、内外モンゴルが清帝国の領土内にあったからである。

一九一九（大正八）年に「語科」が廃されて「語部」が導入され、各語部は、文科、貿易科、拓殖科に分けられたが、蒙古語部の場合、文科の募集はなかった。もっとも「大正九年度経過規定学科時間表」には、蒙古語部第三学年の文科、貿易科、拓殖科のそれぞれの時間数が書き込まれており、当初は文科も想定されていたことがわかる。ところが、「大正十年度学科配当時間表」によると、蒙古語部第一学年には、貿易科と拓殖科しかない。ただし備考に「英仏独語部に拓殖科を置かず、馬来ヒンドスタニー語部に文科を置かず」とあり、蒙古語部に文科を置かない、という規定は、この段階ではなかったようだ。第一学年の場合、モンゴル語（外国語甲）の時間は、貿易科が一五時間、拓殖科が一三時間、中国語（外国語乙）は両科とも八時間であった。

モンゴル語以外に中国語やロシア語を勉強できるのは、就職の上でも有利だと考えられ、蒙古語部を志望する動機のひとつにもなった。学生の中には、むしろ第二外国語に熱中する者も、当然のことながらいた。卒業生の中には、中国語を生かして仕事をする者も多かった。一九三〇（昭和五）年に、ある四年生は、満鉄の人間から「蒙古語部の癖に東京では支那語と露西亜語を沢山やってるなんて、何方とも付かずその精神が面白うない、だから大阪［外語］の方を余計に来るようにしている」といわれた、と書いている（『支那語同学会誌』第一五号）。

授業で使っていた教材に関する資料は少ない。断片的な記録を集めると、一九二三（大正十二）年当時、三年生の

モンゴル語、中国語の授業はそれぞれ、四時間と一〇時間だった。モンゴル語の授業は、神谷衡平が『モンゴル秘史』、ゴムボ＝バドマジャブはモンゴル史に関する教材を使っていた（『炬火』第一号）。実用的というより、どちらかというとアカデミックな内容だったことがわかる。

四年制になってからの一九三〇（昭和五）年のカリキュラムを見ると、出村良一は、下永憲次編の『蒙古書簡文選』（北京、一九二五年）を、施雲卿は自分で編纂した会話書と汪睿昌、伊徳欽共編『蒙文教科書』（漠南景新社、北京、一九二三年）を使っている。一九二三（大正十二）年当時の教材と比べると、より実用本位になっている。なおこの時には、蒙古語部主幹の神谷は、モンゴル語の授業は担当していない。

語劇の古い記録としては、一九三四（昭和九）年度に上演された「アジアの嵐」の一場面の写真が残っている（『東京外語東亜同学会会誌』第一号）。「アジアの嵐」は、ソ連のプドフキン監督の代表作品（一九二八年）で日本では一九三〇年に公開されて話題になった。モンゴルをテーマにした映画なので、語劇の素材として選ばれたのであろうが、ソビエト赤軍の援助を強調したプロパガンダ映画をあえて選んだのは、おもしろい。

一九二〇年代後半、三〇年代前半には、シナ語部の学生との合同の大陸旅行が、慣例化していた。一九二七年の場合、奉天から四平街経由で鄭家屯へ入り、そのあとソ連国境に近い満州里にでた。満州事変以前の内モンゴル東部には日本人も比較的少なく、各地で領事等の歓迎を受けた。仏教寺院の描写など、一定の資料的価値を有する記述も旅行記には含まれている。学生たちは、モンゴル社会を実体験し、モンゴル語を実地に使う貴重な機会を与えられた。同時に、旅行の記録は、当時の学生のモンゴルに対する考えを知るうえで、格好の材料になる。一九二九年度の『旅行報告』の中で、ある学生は「我が国が此の方面［＝内モンゴル］に力を伸ばすのは謂ゆる帝国主義や又領土侵略の故でなく、自衛自存自強上からの為であると同じ様に、東洋平和の維持と文化の為である」と述べ、日本の内モンゴ

ルへの進出に何の疑問も持っていない。

「満蒙」の地へ――卒業生の「海外雄飛」――

最初の募集要項（一九一一年三月）によると、新設の蒙古語学科の募集人員は「第一年級約十五名」となっているが、実際に入学したのは七名で、最初の卒業生は、三名のみである。

一期生の菊竹実蔵は、卒業後、三菱合資の嘱託を経て、一九一七（大正六）年に内モンゴルの鄭家屯に貿易会社「三泰号」を設立した。その後、一九二七（昭和二）年に満鉄の鄭家屯公所長となって、「満州事変」を迎えた。菊竹は、一九三一年十月から翌三二年二月までの間、関東軍の将校たちと共に、内モンゴル東部を「満州国」に組み入れるための工作を主導し、特に三二年二月中旬の「鄭家屯会議」を主催し、モンゴル人上層部の新政権への参加を確定的なものにした。三月に満州国が正式に成立し、対モンゴル人行政の最高機関「興安局」が設立されると、その次長（日本人の最高ポスト）に任命され、満州国初期の対モンゴル民族政策を立案、実施した。

菊竹が、卒業式のときにモンゴル語で読んだ挨拶が、一九一四（大正三）年度の『東京外国語学校一覧』に掲載されている。この中で菊竹は、「モンゴルの強化、東洋の安定は、日本にかかっている」と述べている。彼は、この言葉通り、日本の対モンゴル政策の最前線で活動し、「成功」を収めている。なお『東京外国語学校創立二十五周年記念文集』（一九二二年）に「蒙古茶話」という文章を寄せている黄健秋とは、菊竹のペンネームにほかならない。

もう一人の一期生の佐藤富江も満鉄に入った。一九一五年には、『蒙古語』というモンゴル語入門書を出版し、東京外語の非常勤講師も務めた。この入門書は、モンゴル語の教科書としては、最も初期のものに属する。彼は一九一六、一七年にシベリアや外モンゴルで情報収集活動に従事した。満州国が成立すると、佐藤は新京にモンゴル人の教

育のために、「蒙古実務学院」という学校を設立した（その運営に当たっては、天台宗教団からの支援もあった）。

第二期生は、一九一七（大正六）年に卒業した。二期生の就職先をみると、満鉄が二名、三井物産が三名、ほかに蒙古産業協会、南満州製糖会社が、各一名である。一名を除くと、勤務先は大陸であった。このなかで、三井に入った大島清は、フレー（現在のオラーンバータル）に派遣された。このときの報告書（タイプ版、東京外大図書館所蔵）は、ロシア革命後の外モンゴルの状況を伝える貴重な資料として、一九六九（昭和四十四）年に田中克彦によって出版されている。なお大島は、一九二一（大正十）年五月の新校舎落成記念の「海外事情参考品展覧会」に関する記録を残し、その中で「足掛け四年に亘る外蒙古生活の土産で、昨夏帰朝に際し、持って来たもの」についても解説している。大島はこのとき、蒙古語部陳列室に現れた来賓の駐日フィンランド公使ラムステッド（世界的アルタイ学者）とモンゴル語で活発な会話をしたという（『東京外国語学校同窓会会報』第二号、一九二一年）。

これら一期生、二期生の活動から見ると、モンゴル語の専門家の養成をめざして蒙古語学科を設立した日本政府は、所期の目的を達成したことになる。

学生の募集は毎年は行われず、原則として、二年に一回だった。入学者の数も当初は、少なかった。

一九一四（大正三）年から一九四五（昭和二十）年までの間の卒業生は、全一六期、約一七〇名で、卒業生が一〇名を超えているのは、初期は一九二四年と一九二五年で、それぞれ一一名である（例外的に一九二一年の翌年の二二年にも募集があった）。このときの学生は、モンゴルの一九二一年の革命の時期に入学したことになる。

満州事変、満州国建国後、入学者、卒業生の数が、かなり増え、一九三七年から卒業生の数は一五名を超えることになる。一九四一（昭和十六）年の卒業生（三七年入学）は、二四名に達している。四二年の卒業生（三九年入学、戦時繰り上げ卒業）も二〇名を超えている。これらの数字は、入学者、卒業生の数が、その時々の日本の政治状況と

密接な相関関係にあったことを示している。一九三七年に蒙疆政権が成立すると、内モンゴル全域が日本の勢力範囲に入った。

全体の傾向としては、相変わらず、モンゴル語とは関係のない職場への就職を選ぶものが大部分で、モンゴル語を生かして内モンゴルで働きたいと考える者は、少数だった。もっとも大陸志向はあり、満鉄、華北交通などが、人気の職場だった。他方で、どの学年にも、言語学を勉強したいと希望する者が、たいてい、一人か二人いたという。

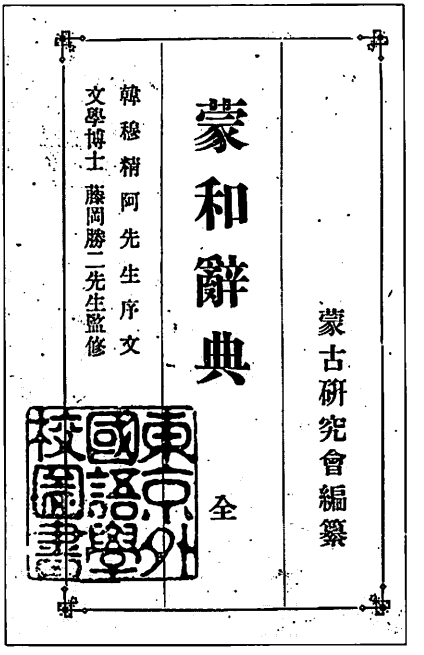
一九三七（昭和十二）年卒業生の進路先を見てみると、半数以上が、満州国政府、大蒙公司、満拓、大新京日報など、大陸の諸機関に就職している。

一九七〇年代後半、八〇年代はじめに東京外大学長を務めた坂本是忠（現代モンゴル研究）は、一九三九（昭和十四）年に卒業し、東亜研究所を経て、四六年からモンゴル科で教えた。アルタイ言語学の長田夏樹（のちに神戸外大教授）は、一九四二（昭和十七）年卒業である。

一九四四年に校名が外事専門学校に変わってからは、「蒙古科」は毎年学生を募集するようになった。四四年度の入学志願者は六七名、入学者は二六名だった。

モンゴル語を学ぶ将校たち

日本で最初のモンゴル語＝日本語辞典は、東京外語関係者によって作られた。一九一七（大正六）年に「蒙古研究会」の名前で出版された謄写版の『蒙和辞典』（藤岡勝二監修、文信社）の編者として名前を連ねているのは六名で、中心になった外山高一（蒙古研究会幹事）は、東京外語のドイツ科を一九〇五（明治三十八）年に卒業したあと、選科生として、モンゴル語を学んだ。外山は、一九一八、一九年に、当時としてはめずらしく、外モンゴルを旅行して



蒙古研究会編の「蒙和辞典」(1917年)

簡単な記録を残している。その中でフレー(現オラーンバータル)のモンゴル語の習得を勧めているのも、注目される。

外山のほかに、一九一九(大正八)年蒙古語学科卒業の二人(渡辺賢次、金久一恵)と三人の陸軍中尉(石原保男、松田光作、宮本徳一)の名前がみられる。三人の将校は、いずれも蒙古語学科で選科生としてモンゴル語を学んだ。

このような学生と軍人の共同作業は、モンゴル科の性格の一面をよく示している。当時、外語のモンゴル科に与えられた任務のひとつは、軍人にモンゴル語を教え、語学将校を養成することだった。

最初に入った鈴江万太郎少佐(陸士一八期)は、大谷光瑞の「二楽荘」でモンゴル語を学んだ後、一九一七年から一年間、東京外語の選科に在籍した。鈴江はシベリア干渉軍の第三師団の一員として、チタを中心に、ブリヤート=モンゴル人に関する情報の収集に従事した。一九一八年十一月のウェルフネウディンスク(現ブリヤート共和国首都ウランウデ)のブリヤート国民議会の大会や、一九一九年二月末、三月初めのチタのパンモンゴリストの会議にも出席した。アタマン=セミョーノフも参加したチタの会議は、「大モンゴル国」臨時政府を成立させた歴史的大会である。鈴江は予備役に退いたあと、モンゴル語の辞書の編纂に心血を注ぐが、完成を待たず、病死する。鈴江がシベリアや北京で収集した貴重な文献の一部は、現在、東洋文庫に所蔵されている。鈴江は日本のモンゴル研究の基礎を築

いたひとりである。なお鈴江は、東京外国語学校創立二十五周年の式典で「蒙古に関する口碑」という演題で記念講演を行っている（前掲『創立二十五周年記念文集』）。

鈴江の仕事を引き継ぎ陸軍省編纂『蒙古語大辞典』（偕行社、一九三三―三六年）を完成させたのは、下永憲次中佐（陸士二三期）である。下永は、一九二三年から一年間、やはり蒙古語部で委託学生として学んでいる。下永は、辞書だけでなく、教科書、読本も出版している。彼はのちに、察東警備軍（李守信［リー＝ショウシン］中将統率）の顧問や徳化特務機関長を務めた。

モンゴル語の学習のための基本的な文献が、軍人によって作成されたことは、当時の日本の対モンゴル政策のひとつの反映である。

下永と一緒に蒙古語部を修了した金川耕作大佐（陸士二六期）は、のちに包頭、王爺廟などで軍の特務機関長を務め、軍の内モンゴル工作を主導した。『蒙古語童話集』（北京、一九二四年）は、下永との共訳である。

参謀本部でモンゴルを担当した矢野光二大佐（陸士三二期）は、委託生として蒙古語部で学んだ期間は短かったが、「靖亜寮」を作るなど、当時の学生に大きな影響を与えた。

外語でモンゴル語を学んだ陸軍将校は、一九一〇年代後半から一九四〇年代はじめまでの間で、二〇人を超える。大部分の学生は軍人と机を並べてモンゴル語を勉強した。軍人たちは、選科修了後も同窓生として、外語との関係を維持した。

戦争とモンゴル語

一九三九（昭和十四）年に『朝日新聞』に連載され、その後、単行本にもなった、モンゴルからの亡命者ビンバー

大尉著の『外蒙古脱出記』は、日本人の外モンゴル観に決定的な影響を与えた本のひとつである。同年夏に新京で撮影されたと思われる、ビンバーの珍しい写真には、七人の日本人が一緒に写っているが、そのうちの五人は、一九三七年に蒙古語部に入学した学生たちだ。

この年にはノモンハン事件（ハルハ河戦争）がおこり、日本・満州国軍は、ソ連・モンゴル軍に大敗した。ビンバーもこのときに死亡したとされる。この時期から、モンゴル語は、特にモンゴル人民共和国との関係において、軍用言語としての性格を強く帯びることになった。

第二次大戦がはじまると、軍による学生の徴用がはじまった。

一九四一（昭和十六）年七月、三年生七人にハルビン特務機関への出頭命令があり、七人は休学してハルビンに向かった。ハルビンで「陸軍通訳生」の辞令をもらい、一人はハルビンに残り、三人はハイラル特務機関に配属され、他の三人は王爺廟特務機関に派遣された。王爺廟についた三人は、さらにウジュムチン、アバガ、林西に分かれた。これは「関東軍特別大演習」に伴う徴用だった。

このときハイラルで一年間勤務した久保隆臣（昭和十七年卒）によれば、「越境して来た外蒙の密偵の訊問、彼等を再教育して逆偵として外蒙に送り込む」のが与えられた任務だった。当時のハイラル特務機関には、蒙古語部卒業生が、ほかに通訳官の増田寿一（中国語の通訳）、外務省留学生の岡崎修らがいた。選科に在籍して、在学生に大きな影響を与えた矢野光二大佐も張家口から移ってきた。

モンゴル語要員として軍に勤務し、命を落としたものもいる。一九四一年に卒業した一人は、終戦当時アバガ特務機関に勤務していて戦死した。